



裁きようのない茶番法廷

陸山会裁判22日結審

領収書はない。同行者もない。同社の運転手の運転日誌にも、川村証言に合う記録はない。逆に「社長をそのホテルに送ったのは、翌年以降」という証言も出た。さらに、同社で実権を握っていた水谷功会長（当時）は、裏金を渡す時には必ず授受を目撃する「見届け人」を同席させるなどのルールがあったのに、川村社長がそれに従っていないことに疑問を呈した。同社

特に石川氏に渡されたとする5千万円については、都内のホテルで渡したとする水谷建設の川村尚社長（当時）の証言のみ。それもフロント前の無料スペースというところで、

から5千万円の裏金が支出されたことには複数の証言があっても、その金を川村社長がどう使ったのか、実はまったく分からないのだ。これでは、さしもの東京地検特捜部も、有罪を見込んで起訴するわけにはいかない。やむなく形式的な政治資金収支報告書の記載時期問題で起訴したものの、今なお未練たらしく、「動機は裏金隠しだ」と主張し続けている。昨年、大阪地検特捜部の押収証拠の改ざんなどが明るみに出た後、伊藤鉄男最高検次長（当時）が「引き返す勇気が必要だ」と述べた。東京地検の面々は、この言葉をしっかりと聞きしめるべきだろう。

裁判では、特捜検察の捜査手法が問題になった。証人として呼ばれた吉田検事には、3人の裁判官が代わる代わる、取り調べのメモを破り捨てた経緯や意図を問いつめた。後に調査の証拠採否を決める決定では、「メモ紙を破る行為は、それ自体、被疑者に対する威迫ともいえる行為である」と厳しく論難している。

ゲーム的発想で判決を見るな

さらに、裁判所に影響を与えたのは、石川氏が保釈後に任意の事情聴取に呼び出された際、密かにICレコーダーで録った録音の反訳書だった。

捜査が始まった当初、検事が石川氏に対して「特捜部は恐ろしいところだ。何でもできるところだぞ。捜査の拡大がどんどん進んでいく」と述べたことを肯定する会話が記録されていた。さらに、その取り調べについても裁判所は証拠決定の中で批判している。〈表現は一見穏やかなもの

であるとはいえ、内容的には威迫ともいえるべき心理的圧迫と利益誘導を織り交ぜながら巧妙に誘導し、たもの」と評価せざるをえない〉この証拠決定では、検察側が請求した38通の検察官調査のうち、11通が全文却下。20通が一部採用にとどまった。そのうえ、証拠改ざんの前田恒彦元検事が取り調べを行った大久保隆規元秘書の調査は、検察が自ら取り下げている。

結局、検察が使える証拠は限られ、論告では「……と考えるのが自然」「……と推認される」「……と推測を重ねて主張を展開するしかなかった。捜査の実態が明らかになるにつれ、チェック機関としての役割を取り戻していったかに見える裁判所に比べ、やはり検察の作戦に乗っか

ったマスメディアはどうか。さすがに裁判所の決定は大きく報じたが、裏金問題が起訴事実と無関係であることは無視し、検察のアンフェアな立証活動への批判はないままだ。もつとも、検察と一体になって「政治とカネ」を煽ってきたメディアにとって、検察批判は天に唾するようなものかもしれない。国会議員に疑惑があれば、取材によって追及するのは当然だ。だが陸山会事件では、そのために捜査機関に対する監視の役割を放棄し、検察情報垂れ流ししたばかりか、誤報の訂正すらしない社もある。報道機関としてどうだったのか、判決がどうであろうとも、大いに反省すべきだ。有罪なら勝ち、無罪なら負けといったゲーム的発想で判決を見るのは、検察もマスメディアもやめてもらいたい。

小沢一郎の元秘書が描く実像 「悪党」 石川知裕 ニッポンの未来に「剛腕」は必要か 好評発売中！ 定価1680円 朝日新聞出版

左から大久保氏、石川氏、池田光智氏。元秘書3人への判決は9月26日に言い渡される